

---

# 可愛いツンデレっ子？

神童サーガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

可愛いシンデレラ子？

### 【Zコード】

Z3144F

### 【作者名】

神童サーチガ

### 【あらすじ】

最強ドM勇者とシンデレラ姫様のドタバタストーリー。一恋恋愛ありです。美男美女コンビ

(前書き)

ふと思いついたネタで、ぐたれだけじ最強勇者だつたら面白いかと。  
・

「はあ・・・旅か・・・」

皆さんこんにつけば。

俺は勇者です。

え！？いきなり何だよって？

作者に言えよ。

す、すみませんでした！！

生意気言つて！！

名前？

だから勇者だつて・・・

すすす、すみませんでした！！

「何言つてるのよ。バカじやない？」

こいつ・・・

いえ、この方は姫様です。

魔王にさらわれたのを俺が助けに行つたんです。

姫様は、ご覧のとおりツンデレです。

正確にはツンツンです。テレの部分を見せても良いのに・・・

「旅の話は？」

「あ、すみません。えっと・・・」

「このへタレ！何も考えて無いのー？」

普通な、こんな風に言われたらムカつくなしが俺・・・実は

は・・・

「わざと決めなさい！」「ダメ」

「は、はい。待ってください」

「うなんです。

ヘタレな上にダメだなんて・・・

しかも勇者なのに・・・

「（助けに来た勇者がカッコいいのは嬉しかったけど・・・ヘタレだったなんて）」

何か考へてるようですね。  
俺には分からぬけど・・・

俺の容姿は青色の髪に金色の目で、言葉だけならカツ ロココのこ・  
・  
不細工なんです。

「（バカじやないの？すうじにカツ ロココのこ・・・・・・つて何  
をー！）」

なんで姫様の顔が赤いんだろ？  
風邪でも引いたのかな？

「今日は早く休んだ方が良いよ？」  
「はあ？」  
「風邪引いたんでしょ？」  
「（この）の鈍感！――一目ボれだつたのにな・・・（）」

えつと旅の話でしたね。  
・・・・ああああー！  
助けたら旅もへつたくれも無いじゃねーか！  
どうしよ。

「あそこには宿があるわね」  
「えつー？」

「・・・・別の部屋に決まつてゐるでしょーー！」

残念だなあ。

あ、変態つてわけじや無いですよーー！  
か、勘違いしないでくださいよーー！！

宿に入り、記帳に記入してからそれぞれの部屋に入った。

「はあ・・・疲れた・・・」

俺はベットに倒れながら田を瞑る。

姫様を助けた時のことや・・・

まあ。語られる事は無いかもしねれない。

さて、あの姫様は何をしてるのだろうか。

「はあ・・・勇者の戦いつぶり凄かつたなあ」

剣が踊るように舞い、剣筋は青色で光っていた。  
見るもの全てを虜にする剣技だった。

色々なカツコいい王子様を見てきた私さえも、息をするのを忘れるほどに纖細で美しい人だった。

彼ならば、私は婚約しても良いと思つていた。  
だけど・・・

「ヘタレで・・・ショックだつたわ」

魔王の部下を倒してから私に向かって立った時、彼の性格が露になつた。

見た目よし  
強さよし  
職業よし

だけど

性格不よし

「でも・・・やっぱりカッコいい・・・悔しいけど」

熱くなつた頬を冷ますように、お風呂場に向かう姫様。

さて、勇者に戻しますね。

「・・・姫様つて」

おとぎ話などに出ていた姫様と違つて驚いた。

「性格はビックリだつたな・・・」

お淑やかな女性か可愛らしげの子かとおもつたけど、シンデレラ・・・  
デレの割りが多いなら文句は無いよ・

でもさ、シンシンばかりじゃないか!!

でもね!!

凄い可愛いんだ!!

金色のウエーブ・・・

見た目は本当に姫様なんだ。

赤い目で引き込まれそうになつた。

初めて彼女を見た時は、全ての現状を吹き飛ばされた。

声を出すことも田を逸らすことも出来ない位綺麗だったんだ。

「まあ・・・シンデレラのところ可愛いくだなびむ」

溺愛・・・

敵わない片思い。

悔しくて泣きたくなる。

ガチャツ

「！？」

ドアが開く音がして、そちらを見ると・・・

「姫様！？」

タオル一枚だけの姫様がいた。

俺は思わず真っ赤になる。

今まで、姫様以上に綺麗な人なんていなかつたし・・・

「・・・勇者」

「ど、どうしたの？」

「・・・」

「…？」

いつもの強気が無く、消えそうな声で言つた。  
姫様は、タオル姿のまま俺に抱き付いてきた。  
理性が飛びそうで危なかつた。

「つ・・・姫様？」  
「・・・・好き」  
「え・・・」

何が？

俺の脈拍は最高潮にあがる。

顔に現れるんじゃないかといつぱりヤけてしまつ。

「・・・えつと」「  
「好きな勇者・・・」  
「姫様・・・」

顔が真っ赤な姫様。

やつとテレの部分を見せてくるたのは嬉しかつたけど、それ以上に

俺が何を考えてるのか分からなかつた。

「…………ひめさつーーー」

名前を呼ばうとしたら口を塞がれた。

もちろん姫様の口に・・・

つまりはキス。

俺の目は動搖して揺らめいてる。

段々と深いキスになつていき、息苦しくなつてくれる。

「んっ・・・・・」

「はあ・・・なん・・・で?」

息切れしながらも気になつたことを聞いた。

すると姫様は・・・

「好きだからよ・・・悪い?」

相変わらずだ。

でも、俺は嫌じやなかつた。

「勇者は……私のこと……嫌い？」

悲しげに俺を見る。

らしくない……

思わずドキッとしてしまつ。

俺は……

俺は……

「俺も好きだよ……」

「ホントー!?」

「ああ……」

俺の返事を聞いた姫様は先程よりも強く抱き締めてきた。

「あのや……へタレな俺でもな?」この体制はマズいんだよな……

「

タオル一枚で抱き締められてたら、いへり俺でも……  
危ない……

「……」

「(引かれたか!?)」

「……いいよ

「え・・・」

「触れていいよ・・・」

「・・・姫様」

「んつ・・・勇者」

多分・・・このツンデレ姫様に触れた男は、これまでにもこれから先も俺だけだろう・・・

(後書き)

最後は、危なくなりそうでした。でも面白かったし良いっか！――この連載も面白いかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3144f/>

---

可愛いツンデレっ子？

2010年10月15日23時15分発行